学内業界研究会ワールドジョブフェスタ／ワージョブ・ウーマン

在校生支援委員会 委員 **大辺理恵**（大 DM51・院前中北欧7）

2018年度の後半に箕面キャンパスにて各種の就職関連イベントが咲耶会共催のもと開催されました。2018年10月23日～25日には「インターン説明会」（29社の企業、162名の学生が参加）、11月19日・20日そして26日・27日の4日間には、「ワージョブ・ウーマン」（44社の企業、81名の学生が参加）、また12月10日～17日にかけては「学内業界研究会ワールドジョブフェスタ」（73社の企業、259名の学生が参加）が開かれました。2019年1月15日～17日そして21日には「内定者との相談会」（18名の内定者、46名の学生が参加）そして2月18日～21日にかけては「企業研究会」（44社の企業、99名の学生が参加）が催されました。これらのイベントは、阪大外国語学部生のためだけの学内就活イベントです。このイベントを運営している idG株式会社のアンケート調査には、参加した学生から、「阪大外語のために来てくださっていると聞き、心を開きやすかった」、「外国語学部の人のための説明で少人数でしっかりと話が聞けた」「外国語学部卒の方がどんな企業で働いているのかを聞くことができてよかった」「外国語学部向けに企業の方が説明してくださるので、ニーズに合っていて良かった」などといった声がありました。

今後も咲耶会では同窓会として何らかの就職サポートができればと考えております。卒業生の皆様にご協力を依頼することがあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

私の生き方、ここが好き！咲耶茶論（さくやさろん）

講演会・勉強会組織員会 委員長 **河井洋子**（大R27）

毎回好評の「咲耶茶論」は6月29日（土）に、第8回を終えました。このサロン風講演会では、各語科の卒業生の方をお招きして、お仕事やご自身の事など、余り専門的に過ぎず、気楽な雰囲気の中で自由にお話して頂いています。

昨年11月の第6回には英語科卒で英字新聞記者をしておられた笹井常三先生（大E1）に戦時の外大の思い出、記者時代の様々な経験、会われた著名な方々、毎日新聞「余録」の英訳のエピソードなど、大変豊かな内容のお話をして頂きました。とりわけ、先生の書かれた素晴らしい英文見本の数々には圧倒されました。今年3月の第7回はアラビア語科卒で一般社団法人関西ムスリムインバウンド推進協議会理事長の梶川佐穂子さん（大A50）に協会の活動を中心に、イスラム文化全般についてお話頂きました。行政書士としてのご自身のお仕事、イスラム圏の人達との交流、アラビア語の活かし方など、とても時宜に合ったお話で、質問も沢山出ました。

6月の第8回はインドネシア語学科卒でバリ舞踊家の田中千晶さん（大IN38）に舞踊に関心をもたれたきっかけ、留学時代のお話、バリ舞踊の踊りの詳細、現在の活動などをお話頂きました。お話の最後には、衣装に身を包み、ガムラン音楽に合わせ、華麗に踊りを披露され、参加者一同は魅了されてしまいました。

今秋11月30日（土）の第9回にはモンゴル語学科名誉教授の橋本勝先生をお迎えします。面白いお話が聞けそうで楽しみにしています。今後も人材豊かな各語科の卒業生の方々の中からお話をして頂く予定です。自薦、他薦、随時募集しております。

第4回 咲耶出版大賞が決定しました

選考委員 **藤原克美**（大R38 大阪大学大学院教授）

卒業生や教員によって執筆・翻訳された出版物を対象に、外語精神溢れる作品を顕彰する「咲耶出版大賞」の第4回受賞者が決定した。大賞には、深尾葉子氏（大C33）（大阪大学教授）の『黄砂の越境マネジメント 黄土・植林・援助を問いなおす』（大阪大学出版会）が選ばれた。

今回も、専門的評価の高い学術書や、社会的に関心の高いテーマの作品、意義深い翻訳書など多彩な候補作8点が集まった。4人の委員から成る選考委員会は、各自読み込んだ結果をもとに議論を重ねた。

深尾氏の作品は、黄土高原における筆者の長年のフィールドワークに基づき、人間活動とコミュニケーションのパターンが生態系の回復や環境に与える影響について論じている。黄砂に対する一般的な理解と、それに基づいてなされる国際援助プロジェクトに対し、筆者の調査経験から問題提起を行っており、そのグローバルな視点と、既存の枠組みを乗り越えようとするチャレンジングな姿勢に、外語精神が溢れているとして、高く評価された。

特別賞として、成瀬龍夫氏（大C15）の『比叡山の僧兵たち 鎮護国家仏教が生んだ武力の正当化』（サンライズ出版）が選ばれた。成瀬氏は、元滋賀大学学長で経済学の専門家として知られるが、本書は、日本仏教史、あるいは地域史のような分野の書物で、なぜ仏教集団が、不殺生戒を破って武力を形成したのかを検討したものである。本書は、テーマとしても興味深いが、個人的に抱いた問題関心を出発点として、丹念に調査し、論理的にまとめたものとして、ライフワークを書物化する際の一つのモデルともなる作品である。

いずれの作品も、是非多くの人に手に取って頂きたい。